寅彦の情報あれこれ

【「寺田寅彦先生邸址」揮毫原本】

牧野富太郎が揮毫した「寺田寅彦先生邸址」の揮毫原本がオーテピア図書館の収蔵品検索データベースで見えるようになっている。

所蔵は高知市民図書館で、当時の高知市長・氏原一郎宛の書簡（昭和 27 年 11 月 10 日付）に添えられていたようだ。石碑では気がつかないが、配置用マス線を引き、書き直した紙を上貼りしていて、苦労しながら書いていることがよく分かる。牧野は 1862（文久 2）年生まれだから、この時 90 歳で、亡くなる 4 年ほど前である。大きさは全紙マクリ（66.7×134cm）とあるので、ほぼ石碑と同じ寸法のようだ。

ちょっと疑問なのは石碑下部の「天災は忘れられたる頃来る」が含まれていないことである。

牧野富太郎揮毫の原本
高知市民図書館 特設 KK/牧野富太郎資料/(貴重書)

また懐かしい高知の写真で知られる寺田正が寅彦邸を写した白黒写真もこのデータベースに収められていて、石碑や建て替える前の母屋が見える。

【寺田寅彦と日本統計学会】

森田優三『統計遍歴私記』（昭和 55 年 4 月、日本評論社）から紹介する。日本統計学会は昭和 6 年 4 月に創立され、その会員名簿には、寺田寅彦（東京帝国大学地震研究所）が掲載されている。森田は次のように書いている。

この会員名簿をみて気付かれることは、会員のほとんどが社会科学畑の人たちだったということである。統計学会の創立を計画した私たちの気持には、必ずしも会員を社会科学の分野にしぼろうという考えはなかった。しかし、当時は社会科学畑以外に統計学に関心をもつ人はきわめて少なかったのである。この点で特記しておきたいのは寺田寅彦先生の名が名簿にのっていることである。寺田先生は統計学に深い理解をもつ自然科学者として、森鷗外以来、当時ユニークな存在であられた。先生に会員になっていただいたのは、私の印象に強く残る記憶であるが、創立準備会のときの財部静治先生の御注意によるものであって、この組合せは学史的にも、また財部先生の一面を示すエピソードとしても、きわめて興味のあることだと思う。しかし名簿をくり返し見ても、統計方法利用者としての自然科学者の名は寺田先生以外には見当らない。さらにまた数学畑の会員の数もきわめて僅かである。くり返していうが、私どもは決して数学畑の人たちに呼びかけなかったわけではない。数学畑には当時は統計に関心をもつ人がきわめて少なかったのであって、名簿に名前の出ている数学者は当時の統計数学あるいはその関連分野の関係者のほとんどすべてであったといって必ずしも言い過ぎではない。（以下略）

【寺田寅彦の随筆、イタリアで翻訳・出版】

イタリアで出版の寅彦著 2 書籍を紹介する。

左 『俳句の精神』2017 年、55 ページ
収載は表題作と「夏目漱石先生の追憶」
右 『一瞬の大地の香り　日本人の自然観』2022 年、
79 ページ　収載は表題作と「天文と俳句」